文芸特集

たくさんの力作の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれた、さまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

短歌

金子富美子　選

一席

とりどりの花を積みたる「軽トラ」が春の香りをこぼしつつゆく
宮町　田中　澄子

評　現前をとりどりの花を積んだ軽トラックが過ぎて後には花の香りが残る。人はその香りに闘けてゆく春の憂わしい心を感じるのである。「軽トラ」と「こぼしつつ」が秀逸。

嫁ぎゆきて老いし従姉の能登なまり受話器の向こう今日も雪らし
芝新町　荒木　信子

独身で還暦も過ぎ春の宵サンマの開き焼いております
芝樋ノ爪1　山崎普一郎

まつ毛カール終わりてまばたき二つ三つ座席を立ちてゆきたる少女
坂下町3　神谷安久子

諍いてひそかに悔いる気持ちなどおくびにも出さぬ夫の意地よ
領家3　森岡　賢吉

助けてと笑顔の奥で言っていた花束なんて花束なんて
上青木3　岩崎モト子

軍服を仕立て直して黒く染め母の作りしわが学生服
川口1　川久保良治

日の暮れて手を振り帰る子と孫に妻は部屋から杖で応える
安行原　山田　英一

繁栄の昭和のなごり屋根上に赤錆残るキューポラの街
安行慈林　吉川　正秀

指差して口ぐちに言う子どもたち川面に浮かぶアメンボ二匹
鳩ヶ谷本町4　町田　君子

幾棟も老人ホームの建ちあがり町内人口増加するかも
榛松　木村　昌子

携帯のなれし手順をまちがえる母の死知らせる我の指先
坂下町3　川名　佳子

住む人のいま無き家に主ある如く一鉢すずらんの咲く
中青木1　嶋崎　嘉吉

水引けば小さな干潟あらわれて諸鳥つどう春の芝川
桜町6　藤波不二雄

舞ひ落ちる花びら傘に受けながら桜散らしの雨の中ゆく
東川口2　藤森　巳行

裏手から吹きくる風は軒合いを落ち葉を連れて駆け抜けていく
安行原　高橋　清

俳句

山﨑　十生　選

一席

茹ですぎのパスタのやうな目借時
中青木4　田坂　妙子

評　目借時は「蛙の目借時」の傍題で晩春の季語である。睡魔に襲われるのは蛙が目を借りてゆくから、また交尾期だから「妻狩り時」という説などもある。それを〈茹ですぎのパスタのやう〉だと見たところに妙味がある。

逢うごとに千羽鶴折る花の宿
上青木1　石塚　栄

蜥蜴出てめぐれる草や風の彩
西新井宿　市川いさむ

揚ひばり宙のかなたでかくれんぼ
東領家3　市原みゆき

見上げればそれだけでいい五月晴
南町2　浦部千恵子

花の下瞑想に入る地蔵尊
峯　大島　久子

たましひをそっと吐き出す蛍かな
芝宮根町　紺野　義人

百の鳩裏返る空風光る
芝宮根町　佐藤まこと

一途なる気迫ありけり冬薔薇
金山町　篠原　恒子

濁世に決して染まらぬ白椿
本町4　田邉　元子

河骨や武州鳩ヶ谷遊水池
本町3　長谷川恵美子

そこからの始まりですね桜貝
栄町1　藤井とし子

西行忌片減りの靴磨き上げ
南鳩ヶ谷5　村田　和枝

ベクレルといふも忘るる余寒かな
北園町　渡辺　栄治

カフェラテをテイクアウトし新樹光
前川町4　渡辺　修一

川柳

新井　愁思　選

一席

ふっくらと平和見守る羊雲
飯塚2　川瀬伊津子

評　中枢の余情に秘めた意図の深遠。少女期を疎開地に引き裂かれた東京大空襲から、戦後70年。偶さかに得た羊雲の到来に思わず「平和スマイル」を掻き立てられたのであろう。

美意識の中で仏画と対話する
西川口2　松岡恵美子

自己流の手話で通じる良き夫婦
安行領家　原澤かね子

福祉には届かぬ税の二枚舌
鳩ヶ谷本町3　加藤　レイ

見えぬ菌ハイマー病に勝つ構え
川口4　富田千恵子

記憶力比べあってるクラス会
東川口2　星野　直康

爆買いにマナーの悪さ目を瞑る
安行領根岸　堀口　弘一

肌オイルつけるも老いを庇う術
元郷2　田口　公江

巻き寿司もカステラもみな端が好き
東内野　小石　リコ

鴨浮かぶ新芝川の郷土愛
朝日5　堀　晋

朝食が済むと家族へ振るタクト
上青木4　星野　明美

※文芸特集は年1回の掲載を予定しています。次回の募集は広報かわぐちでお知らせします。
問い合わせ…広報課　☎048-259-7628　FAX048-258-5661